
日清戦争期における小林清親の戦争錦絵

明治27(1894)年、朝鮮半島の利権をめぐり、日本と清国との間で日清戦争が勃発した。この戦争は、日本が近代国家として成立して以来、初の対外戦争であった。そのため、国民もその動向に注目し、様々な媒体で戦況が伝えられ、戦争イメージも数多く制作された。特に、鮮やかな色彩をもって日本軍の武勇伝を描き出した錦絵は、たちまち人気を博す。その結果、当時、石版画や銅版画などに押され、衰退の危機に瀕していたが、需要の増加により、出版点数が急増した。それに伴い、多くの浮世絵師がその制作に携わることとなった。この時、絵師・小林清親(1874~1915)もまた、多くの日清戦争錦絵を制作している。

清親は、大胆な明暗表現によって、天候や時刻における変化のさまやその詩情を伝えた「光線画」で知られる絵師であり、日清戦争期の錦絵も、当時、多くの絵師が制作していた「大時代」的な戦闘描写のある作品と比較すると、抒情性があり、鑑賞に堪えうる作品であると評価されている。しかし、このように高い評価があるにも関わらず、その作品研究はまだまだ十分とはいえない。そこで本発表では、清親の日清戦争錦絵について、画の中に見られる光と影の描写に着目し、表現の特異性について述べる。さらに、これまでの清親の画業や半生を踏まえ、なぜそのような表現をするに至ったのかという理由も考察する。

清親は、明治14(1881)年を境に、光線画を描かなくなる。その理由は、光線画が、意図せず政府に加担してしまったためとされている。つまり、開化の象徴であった「東京」を、情緒ある魅力的な風景として描いたことで、読み手に対し、間接的に政府を肯定的に捉えさせる効果を生んでしまったからだと推測される。このことを、反政府的意識が強かった清親はよく思わず、描かなくなったのだと、従来の研究では考察されている。しかし、その13年後の、明治27・28年に描かれた日清戦争錦絵において、光と影への意識が強く感じられる描写がみとれる。それらの作品のいくつかは、日中の戦闘を夜景として描くことで、月光といった自然光と、サーチライトなどの人口光という二種類の光を登場させており、情緒的な画面をつくり上げている。さらに、この描写によって、清親は、日本軍の華々しい活躍ではなく、戦地における緊張感や、重苦しく凄惨なさまを表現していた。

武士の家に生まれた清親は、幕臣として鳥羽・伏見の戦い〔慶応4(1868)年〕に参戦した体験から、日本軍の活躍のみを伝える日清戦争期の風潮を批判的に捉え、戦争を肯定し、戦意昂揚を促すような描写を避けたのではなかろうか。結果として、明治14年までの光線画にみられた光と影の描写は、日清戦争錦絵において復活し、それは、かつての光線画にあった情緒を表しつつも、凄惨な戦地の状況を描こうとしたことで、戦争への否定的な意識を画の中に表現していたと考えられる。